

# 適性検査Ⅰ

(三鷹型①)

注 意

- 1 問題は **1** のみで、5ページにわたって印刷してあります。
- 2 試験時間は四十五分です。
- 3 声を出して読むではいけません。
- 4 答えはすべて解答用紙に明確に記入し、問題用紙と解答用紙を提出してください。
- 5 答えを直すときは、きれいに消してから、新しい答えを書いてください。
- 6 **受験番号**を解答用紙の決められたらんに記入してください。

## 1

次の「文章1」と「文章2」を読み、あとの問題に答えなさい。  
 (※印の付いている言葉には、本文のあとに「注」があります。)

## 【文章1】

同じ小学校に通う「わたし」(円藤季美)と下野原光一は、いっしょに飼育委員をやることになった。

五年生は二クラスしかなくて、飼育委員は各クラス一名ずつ。

わたしと光一くんだった。

最初、がっかりした。

落胆なんて言葉はまだ知らなかったけれど、本当に身体の力が抜けるような気がした。

飼育委員で、しかも相手が男の子なんて、最低、最悪だ。動物の世話を真面目にしてくれる男子なんているわけがない、と、わたしは思い込んでいたのだ。

光一くんも、じゃんけんかくじ引きで無理やり押し付けられた口だろう。きつと、すごくいいかげんで、無責任で、途中で仕事を放棄することだって十分に考えられる。

覚悟しなくちゃ。

わたしは覚悟した。

ウサギもニワトリも、世話をしてやる者がいなければ死んでしまう。

殺すわけにはいかない。自分に預けられた生命を無視できるほど、わたしは凶太くはなかった。優しいわけではない。『わたしのせいで殺してしまった』なんて思いを引き摺りたくないのだ。凶太くないえに、誰かに上手に※責任転嫁できるほど器用でもなかったのだ。

不器用で、生真面目で、融通がきかない。

付き合いたい人だ、可愛げのない子だと言われていた。でも、しようがない。これが、わたしだ。

不器用でも、生真面目でも、融通がきかなくても、わたしはわたしを生きるしかない。

わたしは、開き直ったように、でもどこか頑なに十一歳を生きていた。今でもまだ、そういうところはあるけれど、思い込みの強い性質なのだ。

光一くんに会って、変わった。

光一くんが変えてくれた。

「円藤って、飄々としてるね」

ウサギ小屋の掃除をしながら光一くんに言われたことがある。飄々の意味がわからなかった。

糞を掃き集めていた手を止め、わたしは振り向く。光一くんがわたしを見上げていた。

目が合った。

柔らかな淡い眸だ。

光一くんとも目を合わせたのは、このときが初めてだった。

「飄々って？」

わたしが尋ねる。光一くんが首を傾げる。

「うーん。大らかってことかなあ。あんまり、ごちゃごちゃこだわらない、みたいな……感じかな」

「そんなことないよ」

大声で否定していた。

自分で自分の声に驚いてしまった。

ウサギの糞の臭いが※鼻孔に広がって、咳き込む。

ごほっ、ごほごほ。

「円藤、だいじょうぶか？」

「うん……だいじょうぶ。ちょっと……びっくりしただけ」

「びっくりするようなこと、言っただけ？」

「言ったよ」

わたしは臭いにむせて、また、咳いていた。

光一くんが片手でわたしの背中を叩く。これにも、驚いた。もう五年生だ。男子と女子の距離が何となく開いていく時期だった。距離の取り方をみんな、手探りしている時期だった。

こんなにあっさり背中を叩いてくれるなんて、叩けるなんて不思議だ。

「何を言ったかなあ」

背中を叩きながら、光一くんが咳く。妙にのんびりした口調だった。光一くんに合わせてるように、隣のニワトリ小屋で雄鶏のコースケ

がのんびりと鳴いた。

コケー、コケーツコー。

おかしい。

おかしくてたまらない。

噴き出してしまった。笑いが止まらない。

「えー、今度は笑うわけかあ。どうしたらいいんだろかなあ」

光一くんの一言に、わたしはさらに笑いを誘われる。

おかしい、おかしい。ほんと、おかしい。

何て、おもしろい人だろう。

何て、ヘンテコで愉快な人だろう。

知らなかった。

下野原光一くんて、こんな人だったんだ。

笑いながら、わたしの心は、ほわりと軽くも温かくなって行く。

心地よかった。

（あさのあっこ「下野原光一くんについて」、『短編少年』所収）

### 〔注〕

※責任転嫁：責任を他人になすりつけること。

※鼻孔：鼻のあな。

## 〔文章2〕

田中律は、小学五年生の女の子である。

その日の夜、親戚の叔父さんが、久しぶりに家に遊びにやってきた。

「あらあら、いらっしやい」

愛想よく迎える母に挨拶し、横にいる私を見ると、叔父さんは親しげに私の頭を撫でた。

「やあ、律ちゃん、久しぶり。大きくなったね、今、何年生だっけ？」

「五年生です」

「そうか、そうか、見違えちゃうはずだなあ」

私は叔父さんの手が頭から離れるとすぐに、台所へ行ってお皿の準備を始めた。

「あら律、手伝ってくれるの？ いいわよ、座ってて」

「いいよ、お母さん一人じゃ大変でしょ。手伝うよ」

私は叔父さんがいつもとても親しげに話しかけてくれるのが苦手だった。嫌な人ではないのだが、この人の考える子供像に、いつも私はあまり上手に当てはまることのできないのだった。

食卓の準備ができ、席についておかずを食べていると、母が言った。

「律、ちゃんと、野菜も食べないとだめよ」

「いいじゃないか、好きなものを、好きなだけ食べたほうがいいよな、ねえ律ちゃん？」

叔父さんが言ったが、私はすぐに箸を母が指差したセロリのサラダへと伸ばした。

「律ちゃんは、偉いなあ。でも、子供はもつと、のびのび育てたほうがいいよ、それが一番なんだよ。子供は、やっぱり沢山遊ばないと。」

あ、そうだ、学校では、今、何が流行ってるんだい？」

私はなるたけ声をはりあげて、はきはきとした子供を演じようとしながら言った。

「今は、男の子の間では、ボールをいっぱい使ってドッジボールするのが流行ってます。だからお昼休みには他のクラスとボールの取り合いになっちゃって、みんな急いで給食を食べて、体育館まで競走します」

「そう、そう。それで、律ちゃんは何をして遊ぶのが一番楽しいの？」

私は少し口ごもり、

「最近、英語の塾に通い始めました。それが、その、思っていたより楽しかったです」

と答えた。叔父さんは、

「勉強が楽しいの!? 真面目だなあー」

と大きな声で言って笑った。私は自分の顔が赤くなるのがわかった。私はお正月にも、この叔父さんに大笑いされてしまったことがある。

律ちゃんの今年の目標は何かな? と聞かれて、ぼろっと、「※人畜無害です」と答えてしまったのだ。「どこで覚えたの、そんな言葉」叔父さんは腹を抱えて笑い、親戚中にそのことを言っただけで、「律ちゃん」

「やんは本当に生真面目な子だよなあ」と言っていた。辞典でたまたまその言葉を見つけてなんていい言葉なんだろうと感動していた私は、恥ずかしくて、叔父さんが帰るまでずっと俯うつむいてジュースを飲んでいった。

私は家族に対しても、※麗れいちゃんと久美ちゃんに対しても、とにかく水を差したくない、と考えているのだと思う。だからたまたま見かけたその言葉に惹ひき寄せられたのだろう。皆みなが楽しそうにしていればしているほど、私はその邪魔じゃまをしない上手な相槌あひづちを打つよう心を配った。かといってあまりやりすぎて興味を引きすぎてしまうのも嫌なので、ほどほどの、毒にも薬にもならない言葉を、なるべく選ぶようにしていた。だから麗ちゃんに「つまらない子」と思われるのは当然なのかもしれない。

「でも英語っていうのは楽しいよな。辞書に書いてある意味だけじゃなくて、現地の生きた言葉っていうのが楽しいんだよ」

叔父さんはビールを流し込みながら言った。

「たとえばエアヘッド、空気と頭で『ばか』って意味とかなあ。面白おもしろいだろう？」

私はそんなに面白いとも思わなかったが、話を合わせようと小さな声で言った。

「あの、チキンが、弱虫って意味だったりするのと同じですか」

「そうそう、律ちゃん、よく知ってるね」

「前に、映画で、見たことがあります。クラスでも男の子が、よく使

ってます」

それ以上言うことがなくなってしまい、私は俯うついて、セロリのサラダをまた皿によそった。叔父さんは愉快ゆかいそうに喋しゃべり続けている。

「チキンみたいに、動物で人間を表してる言葉はいっぱいあるんだよ。たとえば、サルはいたずら小僧こぞうとか、がみがみ言う女のことコウモリって言ったりね。あと、何だったかなあ。あ、そうそう、臆病おくびょうな女の子のことを、マウスって言うんだったな」

私はセロリを飲み込みながら顔を上げて叔父さんを見た。

「確かにネズミって、びくびくしてる感じ、するよなあ」

「ま、言葉は違っても、そういう感覚ってのは、世界共通なんだよ」父が笑いながら叔父さんのグラスにビールを注いだ。

私は急いで残りのご飯を飲み込み、空いた食器を持って立ち上がった。

「あの、私、宿題があるから、失礼します」

「宿題なんて、やらないで先生にはたかれるくらいで丁度いいんだよ、律ちゃん」

叔父さんは相変わらずそんなことを言っていたが、私は頭を下げて、子供部屋こどもとに戻った。

部屋に戻って宿題のプリントを開いても、一階からは叔父さんの笑い声が聞こえてきた。自分が笑われている気がして、耳みみをふさぎたくなった。不意に、昼間見た、※塚本瀬里奈つかもとせりなの姿すがたが浮かんだ。

私は、電気を消して、勉強机の下にもぐりこんでみた。体育座りを

して、ゆっくりと瞳ひとみを閉じた。

けれど、リビングからは笑い声と食器の音が止まず、外からは雨の音が聞こえ続けていた。私はうっすらと瞳をあけて、窓からの淡い光にぼんやりと照らされている子供部屋を、いつまでも眺め続けた。

(村田沙耶香『マウス』)

### 〔注〕

※人畜無害：何に対しても害にならないこと。

※麗ちゃんとか美ちゃん：同級生の女の子の名。

※塚本瀬里奈：同級生で、クラスで浮いた存在の女の子。

〔問題1〕〔文章1〕に「光くんに会って、変わった」とあるが、季

美はどのような女の子だったのが、どのように変わったと  
考えられますか。光一との会話の様子から想像できること  
を、三十五字以上四十五字以内で説明しなさい。

〔問題2〕〔文章2〕に「耳をふさぎたくなった」とあるが、このよう

になった理由を六十字以上七十字以内で説明しなさい。

〔問題3〕あなたは、「自分らしさ」ということについて、どのよう

考えますか。〔文章1〕〔文章2〕に登場する二人の女の子  
についてふれながら、三百六十字以上四百字以内で具体例  
を挙げて説明しなさい。

### へきまり

○題名は書きません。

○最初の行から書き始めます。

○段落を設けず、一まずめから書きなさい。

○、や。やなどそれぞれ字数に数えます。これらの記号が  
行の先頭に来るときには、前の行の最後の字と同じように書  
きます。

○。と」が続く場合には、同じまずめに書きます。この場合、  
で一字と数えます。